



### 理事長挨拶

森 淑江 日本国際看護学会理事長  
群馬大学名誉教授

新型コロナウイルス感染症によって世界中の人々の生活が一変して、早くも3年となりましたが、少しずつ日常生活に戻そうとする動きが加速してきました。私たちは3年間マスクを手放せない生活をしてきましたが、2023年3月13日からは「着用は個人の判断が基本」となりました。しかし実際には（家庭を除く）室内だけでなく屋外でも殆どの方が依然としてマスクを着用しています。それでも周囲の人の様子を見ながら徐々にマスクを外そうとする人が増えて行くでしょうし、明らかに街中で人の増加を感じます。

外国人の入国規制は2022年10月から大幅に緩和され、一時は日本人ばかりだった観光地に外国人の姿が目立つようになりました。今年の3月5日（日）に開催された東京マラソンでは、参加者38,000人のうち、外国人ランナーは11,000人という多数に上りました。

JICA海外協力隊はCOVID-19の世界的大流行により、2020年春に世界中の全隊員約2,000人が日本への帰国を余儀なくされましたが、その年の11月には派遣を再開し、少しずつ再開を増やし、2023年1月末現在では63か国822人が活動しています。今後も順調に増えることでしょう。

このように物事は何かが起こっても、元に戻そうという力が働いたり、それに耐えられるように変わって行くものです。

さて、現在任意団体である日本国際看護学会は、今年の4月3日から一般社団法人日本国際看護学会となります。これは問題が起きたからではありません。問題が生じないように組織としての仕組みを強固なものにするためのものです。名称は少し変わりますが、学会としての活動内容は主旨を変えずに、さらに発展したものとして行く所存です。この学会が国際看護を発展させて行けるかどうかは会員の皆様一人一人にかかっています。皆様のさらなる学術集会や学会誌での研究や国際看護活動の成果の発表を期待しております。



写真：浅草寺 雷門前  
観光地に人が戻ってきました。西語担当の東京都観光ボランティアとして、2022年11月から外国人及び日本人への対応をしています。

## シリーズ

# 海外情勢 その1

今回は、海外をフィールドにした看護職の活動について幅広くご紹介します。

初めに、コートジボワールで国際協力事業に携わる、JICA企画調査員の方のお話を伺いました。

## 相互理解の先に

## -コートジボワールでの国際協力事業-

吉野 康恵

JICAコートジボワール事務所 企画調査員（保健分野）

### ①お仕事/活動の内容について教えてください。

JICA（国際協力機構）のコートジボワール事務所で、保健案件担当の企画調査員という仕事をしています。企画調査員は、担当分野・課題に関する案件形成やプロジェクトの実施監理、情報収集・分析、他の開発パートナーとの連携を行います。基本的に事務所を拠点に仕事をしており、先方政府の建物などに執務室を構えている専門家やコンサルタントの方と連携しています。

プロジェクトの実施監理として、アビジャンにある大学病院の新しい母子保健棟の新規建設・機材供与事業（2022年12月に建物は完成済み）という無償資金協力事業、新型コロナウイルス対策や保健システム強化のための円借款事業などの進捗管理をしています。何か問題が起きたときにはそれを収束するように対応します。

新規案件開拓としては、当地の保健省や病院などの医療機関に支援が必要な分野や優先順位について聞き取りに行ったり、ドナー会合に出席して国連機関など他の組織はどんな支援をしているのか、JICAと協力できることがあるのかなどについて、情報収集・情報交換をしたりしています。

上記の仕事は、仕事上バディを組んでいるナショナルスタッフ（現地職員）のサポートなしでは成り立ちません。現地職員からは、現地の保健の状況はもちろん、社会文化的な側面など、多くのことを教わっています。



写真1:完工した母子保健棟

### ②やりがい、または苦勞された点等はどんなところでしょうか。

現地の方々の「日本の支援のおかげで病院の建物ができた！物品が増えた！」という声を聞くと、長い時間をかけて前任者達が積み重ねてきた実績の大きさを実感して、企画調査員という仕事のやりがいを実感します。自分も任期中にその実績を延ばしていけると気を引きしめています。

## 海外情勢 その1

### 続 | 吉野康恵\_相互理解の先に-コートジボワールでの国際協力事業-

**(続) ②やりがい、または苦勞された点等はどんなところでしょうか。**

現地職員から現地のルール・考え方、仕事上の文化・お作法などを学び、一緒に日本からの援助をどのようにこの国に活かしていくのかを考えることができるのはとても貴重な経験だと思っています。

苦勞としては、文化社会的な違いもあって日本で当たり前と思っていることが伝わらず、どう説明したら理解して頂けるか悩むことがあることや、JICAは他のドナーと違って先方政府のオーナーシップ・自助努力を大切にしているので、時に、なぜ他のドナーと同じようにサポートをしてくれないのかという不満を持たれ、なかなかJICA流のやりかたを理解いただけないことが挙げられます。しかしながら、その苦勞は、相互理解が得られた時に、やりがいに変わります。

**③同様の仕事/活動を目指す方へのアドバイスをお願いします。**

日本での看護師の経験・知識は、海外での保健医療に関する仕事に携わるにあたり、貴重な財産となります。臨床での経験もそうですが、もし可能なら、病院経営やマネジメントの経験も積み、海外でその経験を共有することができ、誰かの役に立ちます。どんな経験も将来活かせるので、もし、海外でのお仕事に関心があれば、ぜひ目の前のお仕事からもたくさんのことを吸収してほしいです。

どこの国で何をして働くにしても、自分のやりたいことだけに固執しない柔軟性と、多文化の受容・適応性が必要だと思います。自分の知識や経験を押し付けるのではなく、相手の状況を理解しながら一緒に成長したい、という思いを忘れずに過ごせたらと（自戒を込めて）思います。

言葉は手段にすぎないとも言いますが、直接意思疎通ができれば、よりお互いの理解が高まると思います。すぐに使うチャンスはなくても、英語だけでなく、フランス語、スペイン語、アラビア語など、趣味の一つと思って学んでみることをお勧めします。挨拶ができるだけでも、現場の方は喜んでくれます。（仏語圏アフリカでの保健事業はこれからニーズも多くなると思いますので、特にフランス語を学んでいただけると嬉しいです！）



写真2:セミナー参加の様子  
(右奥が筆者)

## シリーズ 海外情勢 その2

コロナ禍での行動制限が緩和され始め、海外フィールドツアーを再開された、聖マリア学院大学のお話を頂きました。

### 後進を育てること ラオスでのフィールドスタディ

秦野 環

聖マリア学院大学 准教授

聖マリア学院大学は、その教育目標のひとつに「国際社会に貢献できる能力を養う」を掲げ、必修科目の国際保健論と国際看護論Iに加えて、国際看護コース（自由選択）を設置しております。第1期生が3年生になった2008年から毎年、国際看護コースの必修実習科目として「フィールドスタディ」を実施していましたが、2020年と2021年は、COVID-19パンデミックのため、その実施ができませんでした。ただ、学生たちにとって3年生という時間は一生に一度きりであることから、2021年度はラオスのみに限定し、ヴァーチャルフィールドスタディを実施しました。

2022年度は、COVID-19の状況を常に観察しつつ、受け入れ団体であるISAPH(<https://isaph.jp/>)とフィールドスタディの実行可能性に関し何度も協議を重ねたうえで大学と協議し、フィールドスタディを実施することといたしました。COVID-19パンデミックであることからISAPH活動地域であるラオスに限定し、加えて引率教員を複数人（2名）とし、感染症発症などの事態に備えました。

フィールドスタディは実習ですので、訪問前の事前学修を大切にしております。ラオス人民民主共和国について、文化慣習を含む人々の生活や保健医療について学修し、その内容を渡航前にISAPHスタッフにオンラインでプレゼンテーションを行い、学生のレディネスをシェアし、専門家からの助言を受ける時間としました。また今年度は福岡県から学生の国際活動に対する補助金を頂いたこともあり、事前学修として、「久留米餅」、「久留米の男女平等に対する取り組み」を学修しました。3年生は例年、夏季休暇前は多忙を極めますが、実習での学びをより豊かなものとするように、事前学修の重要性を指導します。加えて危

機管理に関する諸注意を含むオリエンテーション、感染症対策としてワクチン接種など、準備できうるものは、考えられる範囲で万全を期します。

フィールドスタディは、8月29日～9月9日に実施し、現地ラオスでは、ISAPH事業活動地域（カムアン県）と首都ビエンチャンでの活動を計画いたしましたが、感染症により、首都の見学はキャンセルとなりました。ラオスは、国連と世銀による分類では「貧困国」に位置づけられ、開発の程度に諸外国との差異は大きなものがありますが、国内格差が非常に大きいことが挙げられます。首都においては心臓血管外科系の手術も可能ですが、地方の村落部においては、多くの女性が自宅で出産することが当たり前の世界です。



写真1:アウトリーチ活動に参加した母児と学生達

## 海外情勢 その2

続き | 秦野環\_後進を育てること-ラオスでのフィールドスタディ-



写真2:ホームステイ先でのランチタイム

カムアン県では、県保健局の方に保健医療状況のご説明を頂いた後、県病院の見学を行いました。学生たちにとっては、十分整備が整っていない病院を見学するのが初めてであり、「足りないこと」にばかり目が行くことが多いですが、スタッフの方々の工夫や、患者家族の患者に対する愛情など、肯定的なところにも気が付くことができる貴重な時間となりました。また、受け入れ機関であるISAPHは、ラオス農村部における栄養状況から「食用昆虫養殖」を進め、栄養改善と収入向上を目指した活動を行っておりますが、その事業活動の意義と実際に学び、全員が「昆虫食体験」も行いました。村落訪問では、まず、郡保健局の方々が行うアウトリーチ活動（郡病院での受診者を待つだけではなく、毎月、村々を周って、妊産婦健診、子供の成長観察、健康教育、予防接種などを行う）の見学を行い、その意義や活動内容を学修し、妊婦さんや乳幼児とのふれあいも行いました。翌日は、早朝から、村内の3家族に分かれて半日ホームステイをさせていただきました。自分たちの昼食調達のためにご家族と一緒にフィールドに出かけ、タケノコやたにし等を採取し、調理の一部に参加したり、各家庭での生活体験をさせていただきました。ホストファミリーと共に食事をしながら、そのお家のお母さんの出産体験や、その土地に残る文化・慣習などを生でお聞きし、事前学修で学んだことの実際に触れることができました。

学生たちはラオスの方々が抱える多くの困難を観察し、気づき、考える時間を過ごします。と同時に、我々がすでに失いかけている生活における工夫や、食事ひとつに

しても家族を思い、一緒に食卓を囲む愛情などに触れて、医療や看護を考える以前に、生きることとか、家族とか、科学を基盤とした医療従事者でありながら、非科学的な慣習を実践する姿など、まさに現場に足を踏み入れない限りには経験できない学びの時間を過ごしてきました。

帰国後の振り返りでは、開発協力事業と看護の共通性や、公衆衛生分野での活動をより明確に志望するようになったこと、国際協力活動への参画を現実のものとしようと決意できたこと等、参加者全員が今回の学びを、まず学生生活に、そして将来に活用したいと述べています。

既に数十年も前になりますが、私が国際協力を学んでいるときにご指導くださった方が、「現地は宝の山である」という言葉を送ってくださいました。今回の学生たちにとっても、ラオスという国は、大きな宝の山であったことと思います。



写真3:児の測定結果はまず母親の手に記録

## シリーズ 海外情勢 その3

海外をフィールドとする看護職の活動として、日本に滞在しながらも多くの支援が可能であることを実感させられます。次は、オンラインによる国際協力活動のお話をいただきました。

### 日本の開業助産師としての国際看護協力のご縁 -オンラインでのベトナム母乳育児支援-

浅野 美智留

聖マリア学院大学 准教授、子育て応援ステーションぽっぽ開設者

#### <人間の普遍性>

人間に共通する生・老・死など国を越えて普遍的なものが異文化の中で根付く微妙な、あるいは明らかな違いは、私たち日本人の看護観、人間観、健康観を広げて豊かな示唆を与えてくれます。国際看護の経験は、上記のような看護の主要概念を自分の中で再構築させる機会です。すなわち看護基礎教育でも、普遍的なものに對峙しながら日本の看護を発展的に考える材料を国際看護は提供できると思います。

普遍的なものは医学が発展しても管理できません。普遍的な現象に向き合う時、医学モデルから自律して看護を発展させるアイデアを自己の内部に広げると思います。助産実践は「産み育てる」という人間の普遍性への不必要な医療管理を防ぐ存在でありたいし、普遍性を守る臨床を国際看護に活かした経験について書かせていただきます。

#### <開業助産師と国際看護のご縁>

私は「産婆のような仕事がしたい」と青年海外協力隊に参加しました。人間の産み育てる力を医療で管理しない所で働きたいという動機に対し、青年海外協力隊の舞台は、予測以上に看護や人間の本質を教えてくださいました。医学モデルからの自律を希求する想いは、帰国後の自分の出産や、乳房ケアの開発に影響して、2014年に母乳育児支援の助産院を開業しました。自立/自律して自己責任を負う開業助産師の叡智を、日本の病院産婦人科

に取り込むことも、医学モデルから独立する一つの道だと私は考えています。多くの実践知を開業助産師から教えてもらいました。関連して 日本の開業助産師の叡智を途上国に輸出する JICAの「出産のヒューマニゼーション」のプロジェクトに共感しています。また開業助産師としての JICAの青年研修（母子保健）との関わりを、東京、福岡と幾つか別々のルートでご縁をいただきました。以下に、開業助産師として2022年度にベトナムの母乳育児支援に関わった経験の感想を紹介いたします。



写真1:開業助産師として働く筆者

## 海外情勢 その3

続き | 浅野美智留\_日本の開業助産師としての国際看護協力のご縁  
-オンラインでのベトナム母乳育児支援-



### ＜ベトナムとオンラインでつないだ研修＞

「人間（母児）が持つ力」や「母児の自尊感情」を引き出し、「より健康に過ごす自立力」を目指したケアリングの考えに基づく乳房ケアを開業助産師の寺田恵子さんと開発し、「NPO法人BSケア」を設立しました。BSケアは母児の相互作用で母乳育児は確立する、という普遍性に基づきます。児の母乳吸啜を真似して指を動かしますので、母性看護のテキストにも紹介されているマッサージという概念はありません。吸啜する赤ちゃんの本能的な力を技術に生かすので、お母さんに「本能的な力をマネするだけで、乳房の現象が変化する。赤ちゃんは素晴らしい！」というメッセージを言葉にして贈ります。

ベトナムで国際協力をしている助産師さんが、旧友である寺田助産師さんに伝達講習の依頼をして、この機会につながりました。赤ちゃんの吸啜を真似するシンプルな技術であるため、リモートで説明しながら共に練習をしました。

途上国の看護職は医療処置などの業務範囲が広いので、時にミニドクターになりがちですし、今回の講習には医師も参加する、ということで、慎重に取り組みました。講習の途中で果物が配られ（さすが！）、の

どかな講習会でした。参加者のモチベーションは様々な感じを受けましたが、質疑応答では医師も含めて活発なやり取りを行うことができ、産後早期の乳房緊満の疼痛は共通した悩みで、これも普遍性かもしれません。

受講者の感想には様々なものがありましたが、技術は喜んでいただけ、伝達講習の窓口となった助産師さんはホリスティックケアやケアリングなど、実践哲学にも触れた感想を書いていらっしゃる、技術や医療者が指導・管理する考えに偏っていなかったことが嬉しかったです。

### ＜医学モデルから自律した日本の看護力＞

このご縁も、JICAの「出産のヒューマン化プロジェクト」が日本の開業助産師の実践力を活用しているように、自分が開業助産師から技術を学んだお陰です。開業助産師は、医学モデルから一番離れた場所で助産実践を行っており、人間の普遍性・本質的な力を生かした専門職です。これからも日本の開業助産師の自立した実践力、薬剤処方などを優先しない看護力を国際看護協力として輸出する場が広がったら、と願っています。



写真2: オンライン研修の様子 出典:NPO法人BSケアHP  
<https://bscare.net/report/5729.html>

# 第6回学術集会報告 1

2022年9月18日(日)第6回学術集会がオンライン開催されました。学術集会会長を始め運営に関わった方々にご報告頂きます。

## 学術集会会長報告

河原宣子

日本国際看護学会第6回学術集会会長  
京都橘大学

まずは、第6回学術集会にご参加いただいた皆様と学術集会の企画・運営を支えていただいたすべての方々に心より感謝申し上げます。また、この場をお借りいたしまして、新型コロナウイルス感染症パンデミックや水害等の影響で、大変な状況に遭われた方々への心からのお見舞いを申し上げますとともに、日々、それぞれのお立場でご尽力いただいている皆様に敬意を表します。

現在、世界中で時代の波がうねりをあげて大きく変化しているような感覚を覚えます。

混沌とした激動の時代において、国際看護活動を担う人材育成とその教育の質保証が重要であると改めて感じます。今回の学術集会でのすべてのご発表、そしてディスカッションは、大変有意義なものでありました。各Roomで活発な意見交換が行われており、嬉

しく頼もしく感じました。新たな出会いもあったと思います。どんどん交流の輪が広がればいいなと期待しています。

教育講演で森淑江博士もおっしゃっていましたが、異文化看護を包含する国際看護学では、「看護の原点」がより浮き彫りになります。さまざまな文化的背景を有する人々への看護とは？を問い続けることで、創造的に教育内容や教育方法を考えることにつながると信じています。学生さんや研修生の方々、教員や研究者、実践家など多様な立場の人々が相互作用をし、化学反応を起こしながら創造的に国際看護の教育プログラムを創り上げること、それは、国際看護学という学問の発展においても重要であると信じます。

誠にありがとうございました。



写真1: 学術集会会長 基調講演



写真2: 学会理事長 教育講演

## 第6回学術集会報告 2



### 教育活動・研修委員会企画シンポジウム

### 「中国人看護師の事例から考える外国人看護師の教育支援」

大植 崇

日本国際看護学会 教育活動・研修委員会

兵庫大学看護学部看護学科

本シンポジウムの目的は、本シンポジウムでは、中国人の事例を通して外国人看護師の教育支援について考察するため、日本の病院に勤務している中国人看護師、支援者として活動している教育関係者、臨床で中国人看護師を迎え入れて教育支援をしている看護管理者の3者より話題提供していただき議論することであった。司会は、日本国際看護学会教育活動・研修委員会の呉小玉氏・堀込由紀氏がつとめた。話題提供として、外国人看護師の立場から、鄒佼佼氏（京都光華女子大学）、教員の立場から王麗華氏（大東文化大学）、看護管理者の立場から、小坂晶巳氏（社会医療法人財団慈泉会相澤病院）が発表をした。鄒佼佼氏は、「外国人看護師の立場で～困難を感じた事例紹介～」をテーマに、外国人看

護師として日本の医療機関で仕事をする上での困難なことを具体的な事例を示しながらプレゼンテーションされた。次に、王麗華氏は、教員の立場で、「看護職を目指している留学生への看護学教育」をテーマに、留学生への看護教育について、具体的な教育内容を話題提供された。小坂晶巳氏は、「当院における中国人看護師の教育支援の現状と今後の課題」をテーマに、中国人看護師の受け入れから臨地での教育を含めて話題提供があった。

発表後の議論の中で、外国人看護師のフォローアップ、EPA以外の外国人の支援など議論をし、様々な外国人看護師の教育支援について実りある議論を行った。

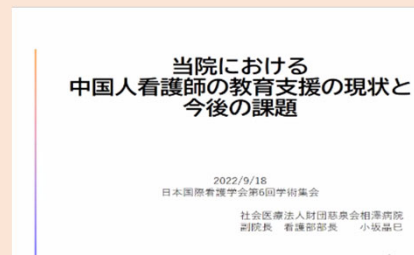
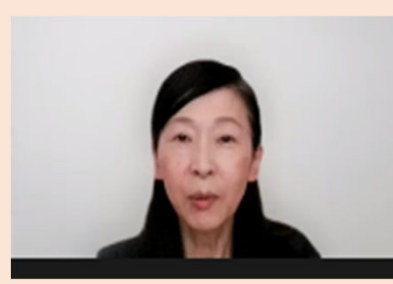
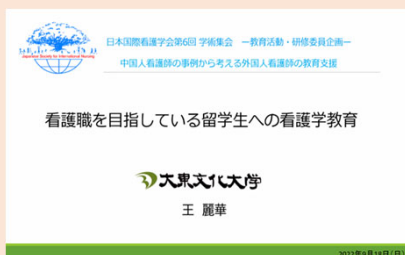
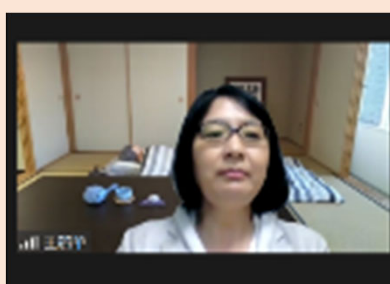


写真:シンポジウムでの発表

## 第6回学術集会報告 3



### ワークショップ

### 国際看護ティーチングメソッドをシェアしますー体験記

横山 詞果

滋賀県立大学人間看護学部大学大学院

第6回学術集会でのワークショップでは、「国際看護ティーチングメソッドをシェアします」というテーマのもと、多岐にわたる国際看護の内容をどのように授業で伝えているのか、複数の教員が普段から実践している授業を実践する形式で行われ、参加者は実際に授業を受講し、学生側の立場でも体験できるようになっていました。

私も実際に授業を受講させていただき、先生方の豊富なご経験から、創意工夫が積み重ねられた授業を、わくわくしながら聞くことができました。また、学生が経験したことのない国際看護への興味・関心の弾き方や、リアルさの出し方などさまざまな授業展開を体験することができました。今後の自身の授業にぜひ取り入れていきたいと思いました。

私自身は、セネガル共和国での JOCV

看護活動の実践をもとに、日々試行錯誤しながら授業を実施していた、日本とは異なるセネガルの人の文化や宗教、慣習などを伝え、それらから培われている健康観や死生観をどう伝えていくかをテーマとして発表させていただきました。今回のワークショップで貴重な発表の機会をいただき、自分自身の授業について振り返ることができ、またご意見や助言をいただき、ブラッシュアップができそうな手ごたえを得ることができました。

今回のワークショップは、授業での教え方の手段や方法を共有するだけでなく、国際看護を授業するにあたり、本当に伝えていかなくてはならないことは何なのかを考えさせられるものでした。今後もこのような、国際看護教育の実践を共有できる場が継続的に開催されると良いと思います。

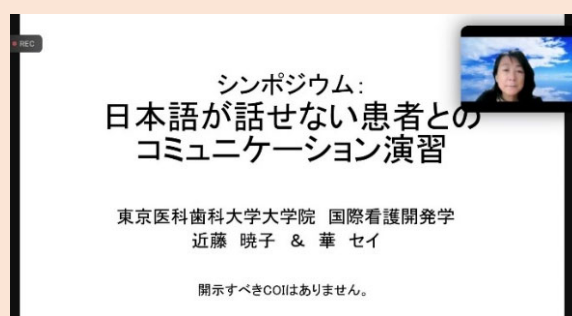


写真:ワークショップの様子

Part1 (写真左)、Part2 (写真右) の2部構成で実施された

## 第6回学術集会報告 4



### 日本国際看護学会第6回学術集会を終えて

マルティネス真喜子 第6回学術集会事務局担当  
京都橘大学

まずは、2022年度日本国際看護学会第6回学術集会を無事に終えることができ、ご協力いただいた皆様、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

今年度もオンライン開催となりましたが、全国から80名を超える方々にご参加いただき、大変意義ある交流を行えたのではないかと考えております。今年度のメインテーマは「広めよう！国際看護ティーチングメソッド」でした。世界情勢が著しく変化する中、国際看護教育をどのように教授していくか、次世代が何を受け継ぎ、どのように国際看護を創造し展開していったらいいのかについて語り合い、情報共有し合う場を提供できれば、という思いが込められたテーマでした。昨年12月に本学術集会の準備委員会が発足し、毎月ミーティングを重ねて本学術集会をつくり上げてきました。準備の過程では、会計の細々した作業も確実に穴吹様（京都第二日赤）にこなしていただき、一般演題の査読やとりまとめについて限られた期間で迅速に大植先生（兵庫大学）や竹下先生（京都橘大学）にこなしていただき、委員会企画や交流会運営について松永先生（神奈川県立保健福祉大学）にしっかりさばいていただき、全体をがっちりと大会長河原先生が総括してくださいました。また、この準備委員を陰ながら相当大きな力で支えてくださったのがCSTの石川様です。この準備委員メンバーなしではこの学会は成立し得なかったと思っています。準備委員の中でも教員の方々は、大学での業務の他、ご自身の演題発表や委員会活動を掛持ちしつつ、また臨床看護師の方は、勤務の合間を縫って準備にご尽力

いただきました。本当にそのパワーに脱帽です。また、Zoomでの大会運営についてもゼネット様が的確に進めていただけたことでトラブルなく終えることができました。感謝申し上げます。当日発表や座長をお勤めいただいた皆様におかれましても、きっちりと時間を厳守しつつ、みごとに円滑な運営をしていただき、本当にありがとうございました。感謝の言葉しか見当たりません。事務局として私ができたことは何もないのですが、準備・運営に関わってくださる皆様、学術集会に参加される皆様の貴重な時間が、有意義なものとなったのであればとても嬉しいことだと思っております。

河原宣子大会長の基調講演や森淑江理事長の教育講演では、メインテーマに込められた思いが伝わってくるものでした。これまでの国際看護、そしてこれからの国際看護。国という枠組みを超えて、世界中の人々が笑顔でいっぱい毎日が過ごせるように看護職として何ができるのか、次世代を担う人々と共に考えていきたいと思いました。そして、我々が創意工夫した国際看護ティーチングメソッドを共有し、広めていくことはこれからもずっと続けていくべき活動であると再認識しました。

改めまして、日本国際看護学会第6回学術集会にご参加くださった皆様、準備・運営にご尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

# お知らせ

## 第7回学術集会のご案内

**日 程：2023年11月18日（土）・19日（日）**

**会場：**

**【1日目】 With You さいたま（埼玉県男女共同参画推進センター）**  
埼玉県さいたま市中央区新都心2-2 ホテルブリランテ武蔵野3・4階

**【2日目】 埼玉県立大学大学院サテライトキャンパス（さいたま新都心）**  
埼玉県さいたま市中央区新都心1-2 埼玉県立小児医療センター 8F

**学術集会長：齋藤恵子（埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科）**

**学術集会事務局：埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科内**

〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮820

Email： [7jsin2023@gmail.com](mailto:7jsin2023@gmail.com)

### ご挨拶

この度、日本国際看護学会より第7回学術集会長を拝命しました、埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科の齋藤恵子でございます。2023 年 11 月 18 日（土）・19日（日）の2日間、埼玉県さいたま新都心（さいたま市）のWith You さいたま(埼玉県男女共同参画推進センター)および埼玉県立大学大学院サテライトキャンパスにて学術集会を開催させていただくことになりました。

今回の学術集会のテーマは「多文化共生推進における看護の役割 ―誰もがその人らしく生きるために、連携・協働―」としました。学術集会を通じて、多文化共生推進における看護の役割について、教育、臨床、地域活動等の様々な場における知識・経験・課題を共有し、地域で連携・協働し、誰もがその人らしく生きるために、皆様と実態や課題の共有を図りたいと考えております。

本学術集会は3年ぶりに対面での開催を再開し、一部のプログラムをハイブリッド開催とする予定で準備をすすめております。学術集会では皆様と直接お会いし、ディスカッション、情報共有、交流を通して新しい発見や出会いがありますことを楽しみにしております。多くの皆様のご参加、ご発表を企画委員一同、心よりお待ち申し上げます。

2023年 3月吉日

第7回学術集会長 齋藤恵子（埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科）



#### 編集後記

本号は、シリーズ海外情勢として、現場のカウンターパートと協働する国際協力事業、学生のフィールドスタディ、さらに日本からのオンライン研修など、幅広い国際看護の活動をご紹介いただきました。また学会報告にも充実した記事をいただきました。本学会の活動を広く知って頂く機会になれば幸いです。広報委員一同、NEWS LETTERを充実させていきたいと思っております。皆様からも、「こんな学会活動を紹介したい」、「こんな国際看護学の一面を伝えたい」などのご意見、さらなるアイデアをお待ちしております。

碓井 瑠衣（日本国際看護学会 広報委員）